

共、かつておぼえ不申候。御なは御きく様と申よし、つね
く(御影)りうこう物がたりにてうけ給申候。つぎにりうこうわ
かないわと申候。

半七郎は、

きしの様

おかわ様 御返事人々申給へ

御きく様御せいきやう月日、すいぶんすちめのかたをたづ
ね候へ共、しかとされ不申候處に、りうこう久しく遣ひ候
物申は、此あと四十ねんばかりさきまで、さいはうじりう
こうかたへいで入御さ候と申につき、心もとなくぞんじ、
さいはうじへたづねにつかひ候へば、大なごん様御ひめ
様、御えい御いはい御さ候。御かいみやうはきんけい(金鏡玉童)くう
ぎよくだう女様と申候。すなはちさいはうじはさいきやう(正五位下)
じまつじゆゑ、しゆんかう(香室)のん様より、御いはい、御えいつ
かはされ候よしにて、いまに御さ候。御えいは御としごろ
は六七歳様に見え申候。御てにきくのはな御もち被成候。
御そばにひいないぬばこ御さ候。もし御きく御ひめ様に
御さ候はんやとぞんじたてまつり候。御かいみやうつさ

せあげ申候。

金溪空玉童女 天正十二年八月廿一日

右書簡にて見れば、そのかみ春香院殿より菊姫君の位牌及
び肖像を西方寺に置かれし也。春香院殿は利家卿の御七女
にて、菊姫君の御妹也。初め細川與一郎忠隆主に嫁妾し、
慶長五年有故離縁、同十年村井出雲長次の室と成り給へ
り。さて右肖像は繪像にて、今も西方寺に傳來す。松雲公
山本基庸をして穿鑿せしめ給ふ時の覺書に、坂本西教寺へ
罷越相尋候處、大納言様大津に被成御座候時分、御息女
御逝去、則當寺に而御葬送有之。御影・御位牌・御魂屋被爲
立置、日牌料も被上置候由、御影贊寫。

金溪空玉童女肖像

秋風吹草花。友命更匠留。

假貽丹青質。庸回向看經。

于時天正十二年八月廿一日 眞智上人判

淺野茂枝曰く、右坂本西教寺に納有之菊姫君の肖像と金澤
西方寺の肖像、其の圖する處全く同じ。兩寺の分同時に畫
圖を命ぜられ、西教寺と西方寺と兩寺へ位牌と共に納め給

ひしと覺ゆ。但し肖像の贊は坂本西教寺の御影のみ也。西

方寺の御影には右の贊はなしといへり。今按するに、右西
教寺肖像の贊にて見れば、西教寺の御影は、天正十二年八
月姫君逝去の時畫圖を命ぜられ、眞智上人は同寺の住職
にて、その頃贊を依頼し給ひたるなるべし。又金澤の西方
寺なる御影は、春香院殿の納め給ふとの事なれば、稍、後
の事にて、坂本西教寺の肖像を模寫命ぜられたるものなる
べし。西方寺の寺記に、天正十二年八月廿一日利家卿上京
の際、息女なる菊姫の方逝去せられ、當寺本山坂本西教寺
へ埋葬に相成、法名を金溪空玉童女と稱し、回向料として
毎年玄米五十石を寄附せられ、内十五石本山へ納め、爾來
五十二年の間其勤め怠らず。然るに寛永十三年四月火災以
後、其事止む。とあり。寛永の火災といふは、八年四月十
四日の火災の事歟、又十二年五月九日の火災の事ならんか。
十二年の火災は、三州志に、一作十三年とあり。

○西方寺鏡天神

此の天神は、中納言利常卿の寄附し給ふよし傳承し、畫像
にて、世人鏡天神と呼べり。甚だ古畫にして、靈異殊勝なり

といひ傳へたり。

神像の贊辭

堂々管相國。直氣肅睿紳。

遺愛梅花在。調和天地香。

煤 梵 淳 印

七字尊榮天所封。西都北野託神蹤。

德馨只在梅花上。貞節猶存一夜松。

林泉歸才印

○永龜山金剛寺

曹洞宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基、天正年中於
越中守山海老坂建立、慶長十二年與村三郎兵衛先祖與村周
防、金澤へ呼越、寺造立致度とて、犀川一橋之邊に寺屋敷
拜領致し建立候處、利常卿御代右之寺地御用地に相成被召
上、爲替地於石川郡泉野千九百歩拜領被仰付、石川茂兵
衛淺野將監被打渡。とあり。按するに、與村周防長元は、
大聖寺城攻に討死せし與村采女の弟にて、采女の知行五千
石を賜はり、後源左衛門と稱し、慶安三年正月歿す。其の
子源左衛門家を繼ぎ、父遺知の内三千二百石を賜はり、貞